木野通信

Kyoto Seika University was founded in 1968. It started out with high ideals that broke the mold of old Japanese universities. Kyoto Seika University is the place where teachers, studentsand all others are respected as human beings, and where the spirit of freedom and autonomy prevail. Although it is a small university, it is known for producing graduates who are unique and independent. From now on, in order to improve and develop this university, we will continue to believe in these ideals. Kyoto Seika University consists of two faculties: Humanities and Art. The Faculty of Humanities uses educational philosophy of experiencial, intercultul, and interdisciplinary approach to study broadly various peoples and cultures. The main purpose is to gain a deep understanding of living people's socieliesand cultures as a whole. The faculty of Art not only teaches skills and teachniques but also cultivatesinsight into Humanity. While considering the basic question of what is Art to Humans, we search fortrue art expression. Kino Press is a newsletter published by Kyoto Seika University and distributed to students, factlty, administrators, graduates and other members of the university community. This publication is intended to keep readers informed of all aspects of K.S.U.'s development, including on campus event, personnel changes and student news.

KINO PRESS
KYOTO SEIKA UNIVERSITY
NO.28

木野通信 第28号 1997年11月1日発行
京都精華大学情報館文化情報課
〒606 京都市左京区岩倉木野町137
TEL 075-702-5323

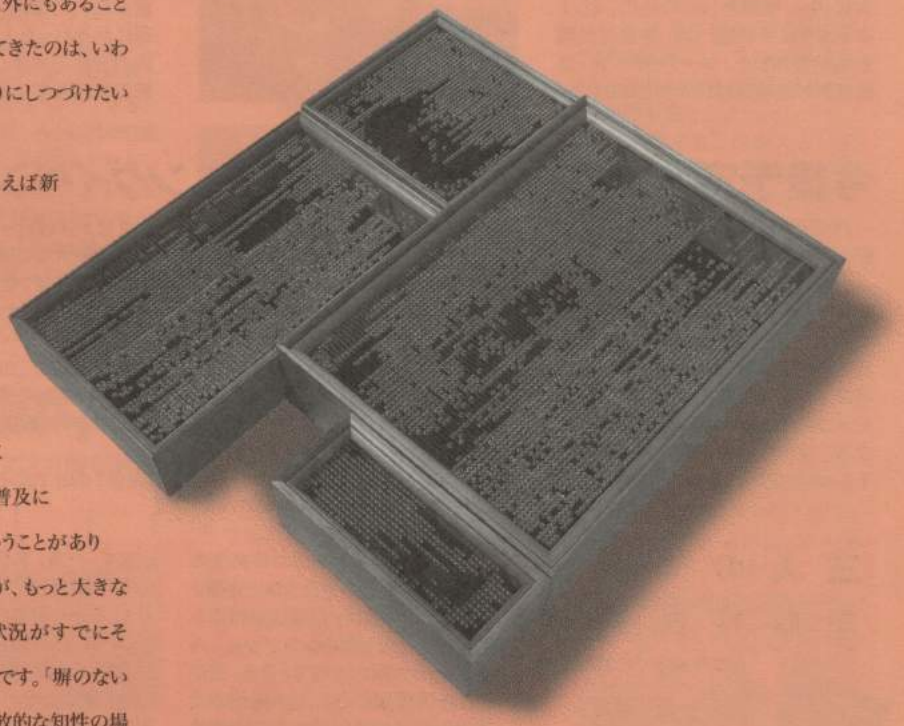
塀のない大学でありつづける

学長
中尾ハジメ NAKAO Hajime

私たちの大学には塀がありません、ということを私たちは誇らしげにいってきました。京都精華大学は閉鎖的ではなく、開かれた大学であろうとしている宣言だったわけです。開放的であろうとすることが、実際に物理的な塀をつくらないことに表れている、ともいいたかったのです。物理的な塀によってキャンパスが囲まれていることを思いうかべてみれば、それだけで、物理的な塀の心理的な効果を感じることができるでしょう。だからキャンパス計画の任にあたった人たちは、きわめて意識的に、石の塀も鉄の門もつくらなかったのです。

もちろん、地形がいわば自然のキャンパス境界をつくっていたということは、じつは幸運だったにちがいありません。谷間にあって外から見えにくいということを、広報的に不利な要素として嘆いたこともあったのですが、それに拘るよりは心理的な開放性を最大限いかすような方向を打ちだせる好条件だとしよう。そういう選択をしたのだと思います。開放的な雰囲気よりも管理の経済効率だというケチな考えだったならば、敷地境界の目にみえるところには確実に立派な塀ができていたことでしょう。もちろん立派な塀も門扉もない大学は、ここ以外にもあることはありますが、私たちの大学が約三十年のあいだ塀なしでやってきたのは、いわば身をもっての思想の実証だったわけです。そのことをさらに誇りにしつづけたいと願わずにはおれません。

しかし、ここにたち現れる課題は、容易いものではありません。たとえば新しい情報館、また情報館ギャラリーが誕生したことは、数十人からの市民が毎日のようにキャンパスを訪れることを意味します。大学での芸術や知的活動のやりとりの重心はいままで圧倒的に教室にありましたが、それが情報館に、ギャラリーにむかって少なからず動くということであり、教員と学生の関係に市民がくわわり、サロンやシンポジウム的な交流がこれまで以上に多くなるということでしょう。さらに、コンピュータの普及による通信情報環境の大変革が、同時進行的に起こりつつあるということがあります。コンピュータでの読み書き能力が必要になるのは当然ですが、もっと大きな意味は、それを通じて、ほかならぬ大学の開放性が、競われる状況がすでにそこにあるということです。もちろん、情報館をつくったのはこのためです。「塀のない大学」を語りつづけるのみならず、積極的かつ実践的に、さらに開放的な知性の場をめざすためです。そこにむかう果敢な取り組みが、さらに多くの学生、教職員のなかから現れることを期待しています。



海と空と
93H005 大西小百合

OPENING 情報館オープン 好調な利用状況

待望の情報館がいよいよオープンした。9月16日の開館以来、連日1,000人を超える利用者がつめかけ、学内外から高い関心が寄せられる情報館の開館後の利用状況をレポートした。

京都精華大学の新しい顔としてその開館が待たれていた情報館が、いよいよオープンを迎えた。

9月11日には学外から425名のお客様を迎え、竣工式が行われた。これは情報館だけでなく、情報館に連なる講義棟・黎明館と、ふたつの建物の竣工式である。黎明館で行われた式典のあと、出席者の皆さんに情報館を見学していただき、はじめてのお披露目となった。

後期授業開始日にあたる9月16日から正式開館し、通常利用がスタートした。

初日から連日利用者は1000人を超えており、1日あたりの利用者数は旧図書館時代の5倍以上と見られている。また、貸出冊数は従来でも同じ学生数の他大学とくらべて多かったが、これも年間貸出数は昨年の2倍以上に達しそうなペースである。

AVセンターも100席のブースが、常時2/3が埋まるにぎわいを見せている。自動入退館システムや、自動貸出機、自動返却機といった新しいシステムも抵抗なく受け入れられ、今ではカウンターで貸出手続きをするひとはほとんどいない。情報館の新しい試みのひとつに、市民への完全公開がある。学外者の利用に際して、年齢や居住地の資格制限を全く設けていないのは、おそらく他大学に例がないだろう。

情報館の開館が新聞各紙でも大きく報じられたこともあって、一般市民の登録者数は開館10日で既に100人を突破。これはある大学では年間登録者数に匹敵する数字だという。市民の皆さんの関心の高さがうかがえる。洛北の知と情報の拠点として、今後、ますます重要性を増すだろう。

オープンした情報館

竣工式

3F閲覧室

AVセンター

自動貸出機

3F閲覧室

国際シンポジウムなど情報館オープニングイベント開催

情報館の開館を記念して、国際シンポジウムが開催された。

『美術と建築の壁を破る〜東アジアの視点から〜』をテーマに10月4日、黎明館L101教室を会場に行われた。

木村重信氏(国立国際美術館館長)の基調講演につづき、討論が展開された。パネリストは中ハシ克シゲ、青木淳、妹島和世(日)、黄賢秀(韓)、張永和(中)、季鐵男(台)の各氏、そして本学からは小林陸一郎、笠原芳光両先生が参加した。コーディネーターは建築家の渡辺真理氏がつとめられた。著名な作家も多く参加するとあって450名を超える聴衆が集まり、東京方面から来られた方も少なくなかった。AVセンターでも、10月中に『戦慄の残像ー伊藤高志　自作を語るー』

『竹ち代毬也ー舞踏公演』『嶋本昭三×伊奈新祐　パフォーマンス「女拓」をめぐって』『磁性体計画　マグネプロジェクトVIDEO WORKS COMPETITION』といった記念イベントを連続して行った。

ギャラリーでは情報館オープニング記念展示として10月12日(日)〜11月3日(月)の間、『京都精華大学収蔵品展(1)「洛北木野の色づかい:精華にかかわった人々展」』と題して、絵画の分野で本学と関係が深かった作家の作品展を実施している。

今後予定されている情報館オープニングイベント

11月以降にも情報館オープニング記念イベントが準備されている。

◆「アッバス・キアロスタミ:わが映画と人生〜大島渚と語る〜」
日時:1997年11月8日(土)13:00〜
場所:京都精華大学黎明館L101教室 <このイベントは申込制になっています。在学生は情報館で申し込んで下さい。在学生以外の方は往復はがきで本学映画イベント係までお申し込み下さい。抽選の場合有り。>

◆オープニング記念展示
○11月9日(日)〜11月24日(月)
京都精華大学収蔵品展(2)
『崇高な神々:中国画像石の拓本展』
○12月2日(火)〜12月14日(日)
情報館オープニング記念展
『マンガは情報である:日韓ワールドマンガ展』
○2月1日(日)〜2月15日(日)
京都精華大学収蔵品展(3)
『戦争の残像:今井憲一遺作展』
──場所・時間は全て以下の通り。
場所:ギャラリー・フロール(明窓館)
開館時間:10:30〜18:30
(会期中は無休・最終日は17時まで)
<入場無料・観覧自由>

問合:075-702-5343 文化情報課

三人の先生方から作品寄贈

本学ゆかりの橋田二郎先生、芝田耕先生、内田晴之先生から作品をご寄贈いただきました。

本学名誉教授で橋田二郎先生の日本画大作9点が9月1日に寄贈されました。作品の一部は情報館の入口ロビーと悠々館のレセプションルームに展示されています。また、新築された情報館のために卒業生で立体造形作家の内田晴之先生が作品をご寄贈くださり、階段を上下する人々がいつも作品のバランス方法などを不思議そうに話しながら見ています。一方、名誉教授の芝田耕先生の洋画大作7点が寄贈され、10月12日から明窓館の<ギャラリー・フロール>で行われるオープニング記念第1回展「洛北木野の色づかい:精華にかかわった人々展」で橋田先生の作品など5人の作家とともに展示されます。

(文化情報課　藤岡昭治)

NEWS チェンマイ大学に矢ケ崎ハウスを建設

矢ケ崎庄司先生の業績を記念して、タイのチェンマイ大に記念施設を建設。

タイ国立チェンマイ大学のキャンパス内に北タイの伝統的建造物が移築され、その建物に人文学部タイフィールドワークを担当していた故・矢ケ崎庄司氏を記念して矢ケ崎メモリアルハウスと名がつけられることとなった。矢ケ崎氏は生前、本学とチェンマイ大学との交流に役立てて欲しいと100万円の寄付をされ、本学でもその有意義な使用方法を模索していた。今年4月に本学でチェンマイウィークが開催された折りに訪問されたチェンマイ大学美術学部教授ウィッティ氏にこれを相談したところ、この案が持ち上がった。この建物はチェンマイ市内に残されていた、現在では極めて数少なくなった築50年の高床式の伝統家屋。これがチェンマイ大学構内の文化財保存地区に移される。すでに工事は9月に始まり、10月1日現在すでに解体、移築と外装の補修を終え(=写真)、今後は内装と電気、水道関係の作業にとりかかる。総工費180万円。完成すれば小規模のセミナーや打ち合わせ、来客の宿泊に利用することができる。12月上旬には両大学の関係者を招きオープニング・セレモニーを開く予定である。人文学部のフィールドワーク・プログラムを通して本学とチェンマイ大学の間での人的な交流が近年ますます盛んになってきた。この矢ケ崎ハウスには両大学の深い結びつきの象徴として、今後に果たす役割が大いに期待できそうである。

(国際交流課 北脇学)

京都精華大学と丹後　地域交流の取組み

この夏、丹後地域をフィールドにさまざまな取組みがもたれた。地域と交流し、また地域での大学の意味をかたちづくる活動となった。

「丹後オープンカレッジ」構想は、丹後地域をフィールドに京都の大学(学生)が調査・研究を行うことで、地域と大学が交流を図ろうというものであり、京都府によって提唱された。

精華にとって丹後は、学舎を持っていることから、もともと縁の深い土地といえる。

京都精華大学はこの構想と連動しつつも独自に、昨年、一昨年と「丹後サマーセミナー」を開催してきた。1泊2日のバスツアーで学生たちが歴史や文化伝承を学ぶというものだ。

本年度はゼミ・クラス単位での、より深い取組みが行われた。人文学部の堤邦彦ゼミでは民話採集や歴史研究。日本画分野の渡辺信喜クラスは自然を描くことでその価値を再発見した。VCDの丸谷彰クラスは、植生・風土・民具などのデザイン・サーベイを行った。建築分野の葉山勉クラスは「手づくり温泉」を企画し、中浜の浜辺に舟形の浴槽をつくり、子供たちに入ってもらった。

京都精華大学では、第3セクターである丹後リゾート開発の委託事業として、廃校となった虎杖(いたどり)小学校の再生を軸とした宇川地区の再開発の提言にも取組んでいる。本年度中には葉山先生を中心に報告書がまとまる予定である。

また、この夏には、多くのボランティアの参加により事故で流出した重油が除去され、海がきれいになったことを記念して、「タコばかしサミット」が開催された。このイベントにも多くの学生教職員が参加、協力した。

今後も京都精華大学としては、いろいろな取組みを通じて、丹後町との関わりを深めていきたい。

東京で美術学部展とシンポジウムを開催

6月25日から5日間、学生作品を展示するとともに、美術教育をテーマに討論。

今年で3回目となる京都精華大学美術学部展(東京展)を麻布美術工芸館で開催した。加えて今回は記念シンポジウムの企画を試み、「美術大学は必要か」と言う自問自答(アンチテーゼ)的なテーマを掲げた。主に東京の美大に在籍し、各ジャンルで現役で活躍される作家、評論家の意見は参列者の方々にとって興味深かったと思われる。パネラーとして日比野克彦(東京芸術大学)、小池一子(武蔵野美術大学)、建畠哲(多摩美術大学)と本学から中原佑介の各氏を招待することができた。

この東京展が社会的かつ文化的にアピールをしていけるか、更に関東圏での本学の知名度拡大に寄与できるかが、今後の課題である。多くの方々の協力とクリエイティブな発想なしではなし得ないことであるが故、東京展委員会の方々の努力が長期的企画のもと、個々の企画が点的なものから線的活動へと発展し、関西と関東を結ぶ導火線として機能してゆくことが大切であろう。

この紙面を借りて何らかの関わりを持って携わっていただいている先生方、学生の諸君にお礼を申し上げたい。来年の企画案も募集中です。

(建築分野教員　新井清一)

動くギャラリー・叡電車内でマンガ展

叡山電車が動くギャラリーになった。この秋も環境マンガ展を開催。

叡山電車にペインティングを施した二両編成の電車が走っている。「エコモーション号」と名付けられ、叡電のシンボル的存在になっている。

今年2月1日からの3ケ月間、車内中吊りを使ったマンガ展を企画した。3月卒業の4年生作品による「車内卒展」である。内容は環境問題であり、中吊りポスターの大きさ、不特定多数の乗客の眼に触れる場であることなど、マンガ展のギャラリーにぴったりであると判断したからである。昨年の9月、叡電沿線の伝説がていねいに採集され、それぞれにマンガ風イラストをつけた「沿線の伝説展」が車内で行われているのを見て、「マンガコースの展覧会も可能ではないか」とその足で出町柳の駅事務所にとび込んだ。

叡山電鉄運輸部の中島健雄氏にご相談して実現の運びとなった。

11月1日から1月末まで、再び環境マンガ展をこの動くギャラリーで開催する。国際環境マンガ展の会場では展示されなかった作品を、展示する。ご乗車の際にぜひご覧ください。

(マンガ分野教員　牧野圭一)

1997年度 秋期卒業式

9月12日午前11時から本館3階会議室において1997年度人文学部秋期卒業式が行われた。

今回卒業を迎えたのは11名。そのうちの5名は秋期入学の留学生である。例年に比べ、留学生以外でこの時期の卒業生が多いのは、授業が完全に半年単位で行われるセメスター制に移行して2年目の入学者だからである。

まず、中尾ハジメ学長から卒業生のひとりひとりに卒業証書が授与され、続いて学長から式辞が述べられた。卒業生の側からも、ひとりひとり学生時代の思い出や今後の抱負が述べられた。大沢真一郎人文学部長からの祝辞を締めくくりに、なごやかなうちに式を終えた。また、式の後、悠々館で祝賀パーティーをもった。

SPECIAL ISSUE

充実する京都精華大学のコンピュータ環境

9月16日にオープンした情報館を訪れたことがありますか？情報館という大きな器の完成から大学の情報環境が大きく変化を遂げつつあります。以前からの資産である図書資料、AV資料及び博物資料という器の中身とともに、器と個人をつなぐネットワーク環境の整備もはかられています。京都精華大学のネットワーク環境について、現況とこれからを報告します。

LANが学内を駆け巡り、世界へつながる

LANとはLocal Area Networkの略称であり、日本語に翻訳する際には、「構内情報通信網」という言葉が使われている。

ひとつの部屋や建物といった,比較的狭い範囲(構内)にある複数のコンピューター同士をつなぐことである。サーバーと呼ばれる基幹コンピューターをデーターの引き出しとして設置し、それを中心に多数のコンピューターを接続し、ネットワークを形成することにより、データーのやりとりをより早く、よりスムースに行うことを目的とする。

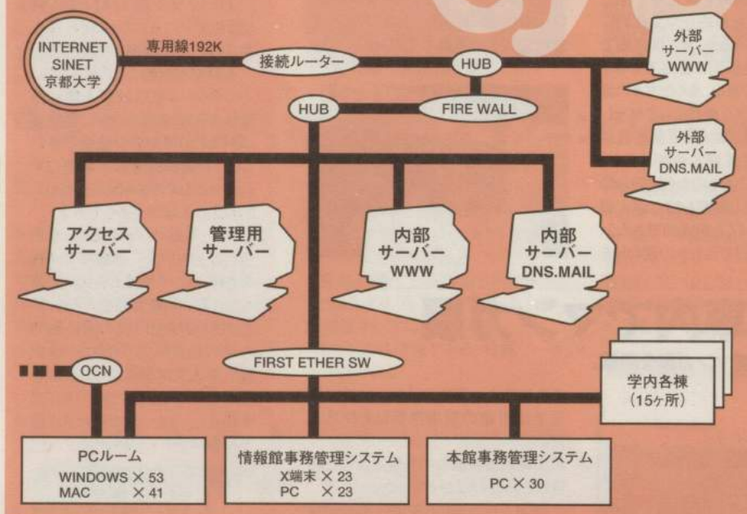
ネットワークシステムにはLAN、MAN(Metropolitan Area Network)、WAN(Wide Area Network)があり、地球規模でのネットワークがインターネットである。

京都精華大学の場合は、情報館に置かれた、大学に関するあらゆる情報を一元管理し、運営をおこなう、サーバーを中心に各事務室、研究室、幾つかの教室がイーサーという専用回線を通してつながれLANを構築している。

いくつものコンピューターがつながることによりLANは新しいメディアとなる。メディアには「媒体」「手段」「手法」といった意味があるが、近年では「情報の表現手段の名称」として用いられることが多い。

一方向のメディアである手紙や電報が文字や記号、両方向のメディアである電話が音声を伝える手段であったのに対して、LANはコンピューター同士をつなぎ、データーという情報の送受信をおこなうメディアのことである。そこでは、コンピューター上のビットという単位に置き換え可能な情報のすべて、つまり文字、記号、音声、画像、動画、etcを伝達することできる。

全方向複数メディアであるLANというネットワークにつながってさえいれば、われわれはライン上にあるコンピューターの情報を互いに共有することが可能となる。また、学内LANは「学術情報センター」を通じてインターネットにも接続が可能となり、世界との交流の機会をえることとなる。



情報館のサーバーを基幹に、事務局・研究室・PCルームなど学内の全てのコンピューターはつながっている。外部サーバーには学外への発信用の情報が、内部サーバーには学内でやり取りするための情報が蓄積されている。

Connected to Global Networks
学外にひろがるネットワーク

学内にある個々のコンピューターはLANにつながることで、外部のネットワークとも接続される。

本学のLANに接続されたコンピューターはLANから専用回線を通して、学術情報センター(NACSIS)が運営する学術情報ネットワーク(SINET)に接続することにより、学術情報の収集、整理及び提供に加え、学術情報及び学術情報システムに関する総合的な研究開発、情報検索、電子図書館サービス、電子メールなどのサービスを受けることができる。また、学生・教職員が自宅からでも大学をいわゆるプロバイダーとしてインターネットを利用できる方向で準備している。

学生・教職員へのアカウント配布で、全員が情報発信者に

ネットを利用する場合、アカウントという各個人に振り分けられた記号が必要になる。本学関係者は大学より配布されたアカウントにより、電子メールやホームページなどを使い、個人個人が情報の発信者となる。なお、アカウントの配布は、教職員が本年11月、学生には来年度初頭が予定されている。

休講、試験の案内などの講義関連や手続きのペーパレス化、研究室や自宅からの情報検索といったインフォーメーション・ツールとしての利用をめざしている。また、他大学や他国を含んだひとびととの新たなコミュニケーション・ツールとしての利用により、様々な出会いの機会が増えることが望まれる。

事務局のネットワーク化で情報の効率的運用

情報処理部門が情報館の2階に設置されている。コンピューターと通信ネットワークを運用・管理しLANの構築を図り学内全体の情報整備を担うところである。これにより、各事務部門で管理されている情報データーを他部署で多元的に活用することができる。それによりデーターの効率的運用、ペーパーレス化が可能となるだろう。

情報教育の中心となるPCルーム

情報館と連続した建物である、黎明館には2種類のPC(コンピューター)ルームがある。Macintosh(マッキントッシュ)とWindows(ウィンドウズ)という世界の標準仕様であるコンピューターに対応するために、Macintoshの部屋には40台、Windowsの部屋には50台のコンピューターが設置されている。画像処理作業の需要が多いMacintoshには「フォトショップ」「イラストレーター」といったソフトが、一般処理作業の需要が多いWindowsには「ワード」(ワード・プロセッサー)「エクセル」(表計算)などのソフトが導入されており、今後もソフトの充実が図られる予定である。PCルームは情報処理などの授業での活用はもちろん、一般開放の時間も設けられており、学生のレポート、課題の制作に役立っている。また、PCルームは学生の講義や大学の枠にとどまることない、ホームページの作成や自主的な制作活動などの場として積極的に活用され、新しい表現媒体としてのコンピューター環境に親しむ場となるだろう。その手助けとなる講習会も開講されている。これらの機材と機会を生かして総合大学にはない、美術と人文の才能を生かした京都精華大学らしい情報発信をおこなうためのツールの使用法を学生、教職員が学び、そして積極的に活用することが期待される。

情報化社会に対応するカリキュラム

本学では美術系学生を対象として、コンピューターを用いた芸術表現手段の拡大をはかるための科目を開講している。それらはおもにフォトショップ、イラストレーターといったドローイング及び画像処理ソフトウエアの習得をしながら、デザインツールとしてのコンピューターの可能性を探る講義と、DTP(デスク・トップ・パブリッシング)やCAD(コンピューター・エイド・デザイン)の技術を学び、それぞれを印刷物を通したヴィジュアルコミュニケーションデザインや、建築設計やプレゼンテーションのサポートツールとしての役割の探求をおこなっている。人文学部では学生が情報化社会に対応をはかるために、ワープロ・表計算・グラフィックなどの基本ソフトの取得を、実習を中心とした講義によりおこなっている。また、人文学部に置かれた「法律と社会」という講義ではコンピューターソフトやそのデータにまで拡大する著作権意識への理解が図られている。また、両学部生を対象として、情報処理関係の科目を設置し、基本ソフトの習得を通してエンドユーザーコンピューティング、つまり利用者の立場に立った専門家の育成をおこなっている。

情報化社会と大学

田村 武(人文学部非常勤講師)

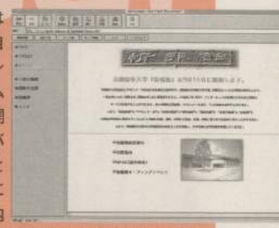
近年、あらゆる教育機関に、コンピューターが導入されている。一見すると、教育現場におけるコンピューターの利用・実践がおこなわれているように見える。しかし、その実は以前からの教育方法の介助するツールとしてコンピューターを導入したということである。コンピューターが教育現場に入ったからといって、学習内容や方法に革新的な変化が訪れたようにはみえないし、人間が必要な知識や知恵を効率的に獲得できるようになったとは思えない。では、情報化社会が進展するなかで、大学はコンピューターを代表とするマルチメディアをいかに活用すればよいのだろうか。

ひとつに、マルチデーターベースとしての情報の充実が挙げられる。情報館に所蔵されている多様な情報源をデジタル化しコンピューター環境上のデーターベースに乗せることで、デスクトップで調査をおこなうことが可能になる。建物の存在の意味が希薄になり、データーベースの中に存在する情報としての情報館が誕生する。

このマルチデータベースはインターネットにより拡散、拡大化する。インターネットに接続することは世界各地に分散した、知恵の集合体に触れることである。それらの知恵は共有を前提にされたものである。インターネット上に日々生まれる情報を活用することは、TVや新聞といった二次加工された情報とは異なり、一次情報を教育の現場に提供することになる。

今、情報化社会は過渡期にあり、今後の変化は予想しがたい。しかし、「知恵の運用と提供」を教育の持つ使命とするならば、大学は新しい情報環境と概念を社会に提示しなければならないのではないだろうか。

ホームページがリニューアルされた



京都精華大学では各部署において独自に設置していたインターネットのホームページが情報館の開館によって、サーバーが設置されたことで、統一されることになった。これは学内サーバーがインターネットへの中継地であるプロバイダーとしての役割も果たすために可能となることである。あたらしい京都精華大学のホームページのアドレスは[http://www.kyoto-seika.ac.jp]である。現在はまだ、試験運用の段階のため大学紹介やイベントなど一部しか見ることができないが、今後は広報関連の充実が期待される。

また、学生一人あたり5メガバイトの容量を持った個人のホームページもアカウントの配布以後に設置可能となる予定である。今後は学生の発信した個性豊かなホームページが大学の広報活動の一翼を担うこととなるだろう。

OB紹介

こどものための博物館ではたらく
李 幸子さん

こどもたちに「自分は自分のままでいい」と気づいて欲しい。

今年7月、扇町公園の一角に、こどものための博物館『キッズプラザ大阪』がオープンした。「センス・オブ・ワンダー」を養うための参加体験型ミュージアムで、遊びながらこども自身が自分で発見を得られることをねらう。大阪の自然を再現するコーナーもあれば、本格的TVスタジオもあり、様々な展示、ワークショップが準備される。

『キッズプラザ大阪』では、展示とこどもを結びつける役割を果たすインタープリターと呼ばれるボランティアが活躍するのも大きな特長の一つ。そのインタープリターのコーディネーターとして働いているのが人文学部の卒業生である李幸子(90L204)さんである。

ボランティアの研修を計画したり、職員とボランティアの仲立ちをしたりする仕事だ。

李さんは、自分が在日韓国人であるということをマイナスととらえてきた。が、京都精華大学に入学してから、いろいろな人との出会いを得たり、アメリカ・フィールドワークに参加する中

で、「自分は自分のままでいい」と考えられるようになってきた。卒論でも祖母の人生を聞書きすることで、<在日>であることに正面から取組んだ。

自分自身の体験から、こどもの時期をどのように過ごすかが重要だと考え、卒業後は<こども>を軸に自分の活動を組み立てた。

卒業後つとめていた在日の研究センターでも、地域のこども会の指導員や在日外国人のキャンプリーダーなどの活動を行っていた。

もう少し異なる観点からこどもたちに関る仕事も面白いかもしれない、と今の職場を選んだ。 現在は、いろいろな経験を持つボランティアの人たちに出会うことがとても興味深い。館の運営も軌道に乗りはじめた今、そろそろプライベートでもこどもたちと直接触れる場に、顔を出してみようと考えている。

キッズプラザ大阪

学生活動紹介……

平安雅楽を学ぶ斎藤尚君

人文学部3回生斎藤尚君は、現在,日本史を担当する橋本初子先生のゼミで雅楽史を研究をする傍ら、自らも、雅楽の横笛である龍笛を奏でる。

斎藤君は高校時代、古典文学にでてくる雅楽の笛に興味を持った。雅楽なら京都だという思いこみと、人文学部の日本・アジアコースに興味を惹かれて京都精華大学を選んだ。

1回生の時、雅楽を知るにはまず楽器からと、京都在住の雅楽器師を電話帳で調べた。今は、そのとき知り合った雅楽器師の先生に月2回の個人レッスンを受けている。

「笛を習い初めて2年半になりますが、音が出せるようになるまでには、1年かかりました。笛は『吹ける』と言ってはいけないんです。『鳴らせる』と言うんだそうです」

自慢の龍笛は、民家の天井裏で何年も燻された竹を使用している。師匠の手製だそうだ。非常に高価であるため最初は師匠から借りて吹いていたが、今年になってやっと食費を削ってためたお金で自分のものを手に入れた。現在、橋本初子先生の指導のもと、雅楽の歴史を学び平安時代の楽譜を読んでいる。

「平安時代の人々がどういう感覚で雅楽を捉えていたのか、雅楽に対する思想的なところを研究していきたいと思っています」

松本ヒデオゼミ……ゼミ紹介

陶芸分野では、3回生から3つのゼミの内1つを選ぶことになっている。私は松本英夫先生のゼミへ入り、主に化粧土による装飾の技法を色々試みて来た。色の付いた泥を生の土の上に塗りつけるという簡単なものだが、その中に色々な可能性を見出すことができた。

その頃の私は、それまでの手法から離れ、何か繊密な手作業に埋没したいという心境だったのだ。それはたくさんの美術館や博物館を見て回った時、良質の美術品はいつの時代も超人的な技法によって造られているという感動から来るものだった。そして、何か1つの技法に執着して行きたいと思うようになったのである。それからは、装飾に力を入れ1つの色を出すのに、多大な時間を費やすことになったが、逆にゆったりとした時の中で制作する喜びを味わえた。

先生は、とても繊細で鋭い感覚の持ち主で、土板を付け合わせる作業を手伝って頂いた時、その洗練された技に脱帽した。

装飾に集中している間、造形の方は、自由に創造力が膨らみ、多様な形が生まれてきた。陶芸の場合、一番問題なのは、土の歪みである。窯の中で土は、重力でたるんだり、割れたりする。それらの限界を十分に考慮した上で、土としての造形の可能性を探って行かなければならない。全体の作品としては、何か物語性を帯びた物を目指している。

4月から教育系の大学院へ通うことになっているので、教師の勉強をしながら、陶芸制作のさらなる発展を試みようと思っている。

(陶芸4年 難波郁人)

意外と近かったケンブリッジ

小椋 純一 (人文学部教員)

昨年の8月から1年余り、在外研究でイギリスのケンブリッジ大学に行くことができました。

ただ、前々からケンブリッジに行くことを考えていた訳ではなく、むしろ、1986年のチェルノブイリ原発事故以降、イギリスも含め、その汚染の大きさったヨーロッパには行きたくないと長く思っていました。それにもかかわらず、ケンブリッジを選んだのは、たまたま近くにそこを薦めてくれる人がいたということや、放射能の汚染に対する認識の変化(それには感性の鈍化ということも含まれるかもしれません)などによるものでした。

セイカには、ボゲット先生のように、ケンブリッジの卒業生の方もおられますが、私にとっては、行くまでは、ケンブリッジはずいぶん遠い存在でした。

ところが、ケンブリッジで大学に行くようになってしばらくして、そこの日本人の学生(主に大学院)らがつっている会から案内をいただき、その会合に参加した時に、どこかで見かけたような学生に会いました。その会の世話役をしていたその学生は、渡辺浩平さんで、セイカの人文学部ができたばかりで、まだ英文科の短大が残っていた頃、末石先生や槌田先生の研究室によく出入りしていた人でした。

彼は、よその大学の学生ではありましたが、ずいぶんセイカには頻繁に出入りしていたようで、セイカのことには詳しく、当時の学生の消息もEメールなどを通してよく知っていました。

彼にはいろいろな所で会うことも多く、そうした折に、当時はセイカの誰もが知っていた犬の大島(大学に住み着いていた犬の名前)の一番の世話役で、その犬を東京にまで連れて帰ってしまった高井歩さんのことや、やはり当時英文科にいた門田里子さんが少し前に結婚された話などを聞くことができました。そのようなことをケンブリッジで聞くとは、全く思いもよりませんでした。(遅くなりましたが、門田さん、おめでとう!ございます!)

なお、ケンブリッジでは、大学のコンピューター・センターを通して自宅のパソコンからもEメールを送受信したり、世界中の情報を得ることができました。私は、ケンブリッジの町から少し離れた村に家を借りて暮らしていたのですが、それによって、ケンブリッジ大学の図書の検索・請求(日本からも可能)や日本の新聞情報などを見るのにずいぶん助かりました。また、京都の情報を見ているときに、人文学部の野上先生のホームページを見つけて、Eメールをお送りしたこともありました。

一方、あるアメリカ人夫妻を介して知り合いになった日本人の女性の方が、この岩倉の近所の上高野の方で驚いたことがありました。また、その方のご主人である同志社大学の杉野徹先生が、今年度から人文学部に非常勤で来ていただいていることを京都に帰ってから知り、さらに驚いてしまいました。

他にも、ケンブリッジ大学では数少ない日本人の教員の奥さんが、私のよく知っていた人だったり・・・と、なんともケンブリッジとの近さを感じることの多い一年でした。

INFORMATION

ギャラリーと多目的ホールが誕生

改装された明窓館にギャラリーと多目的ホールが誕生した

この夏、明窓館が改装され、ギャラリーと多目的ホールがつくられた。

ギャラリーは、情報館に移転後の、旧図書情報館部分を改修したもの。ギャラリーの名称は、笠原理事長によって『ギャラリー・フロール』と名づけられた。フランス語で花という言葉は、すぐれてうるわしいという意味の『精華』、あるいは芸術上の『真理』をあらわすという。

今年度中に4回のオープニング記念展示を行い、来年度4月からの学生・卒業生・教職員の展覧会などの利用申し込みを10月から受けつける。

一方、多目的ホールは、104号教室を改修した。学生の音楽団体や演劇団体から、日頃の練習成果の発表場所設置の要望がだされ、それに応えるためだ。

設計をお願いした建築分野の葉山勉先生を中心に、学生自治会や各団体の学生約20人と大学関係者とが4

月以来何度も会合を重ね、夏期休暇中に改修した。

小規模ではあるが、防音や照明、音響などの設備も準備されている。

黎明館前池のほとりに新しい禽舎

鹿も鳥も教材。精華に動物たちが増えて、禽舎も新装。

美術の学生にとっては、大学周辺の自然も生物も貴重な教材です。このたび、広島県宮島町の鹿寄贈しますという新聞記事がきっかけで、本学でも鹿を飼育することになりました。現在は、今年生まれた雌と去年生まれた雄鹿の2頭です。また『禽舎』を黎明館前池の近くに増設して孔雀を飼い、池には鯉が元気良く泳いでいます。

鹿は1997年9月9日から大学にお目見えし、孔雀は到着の翌日に卵を生み落とし、鯉は池に放たれて10日目に産卵しました。この稚魚が大きくなるのを心から願っています。

『禽舎』をはじめ、鹿も孔雀も鯉も寄贈されたもので、いちいちお名前は記しませんが、ここにあらためて御礼申し上げます。

今まで以上に、キャンパスのあちこちで学生の写生している風景が見られ、かれらの動物園に行く時間と経費が少しでも軽減されればと思っています。

(企画室 杉本修一)

最近の就職状況の変化について

厳しい環境のなかでの就職活動をバックアップする就職課から。

今年度の就職状況が昨年と比べて大きく変わったことは、これまで企業と大学で取り決めていた「就職協定」がなくなったことである。

これによって、企業の採用開始時期が昨年と比べて1～2ヶ月早まり、また長期化・通年化した。さらに、採用の基準も厳しさを増している。この傾向は今後も続きそうである。求人件数は昨年より増加し、インターネットによるエントリー等情報の公開でチャンスが広がった。

一方、学生は会社をよく知り、自己分析をし、自分の良さや強みを伝える事が重要なポイントとなった。

今年度就職課では、直前対策として3年生の春休み期間に個別相談会を持ち、それぞれの疑問や相談に応じて、各業界の動向や情報等を提供した。4月からは事務局就職課がリニューアルし、資料スペースや学生用スペースを増やすとともにパソコンを2台設置した。

大学生が就業体験をする「インターンシップ制度」をとりいれる企業・大学が増えている。美術学部ではインターンシップの先駆けともいえる「学外実習」があるが、今後は、人文学部も含め検討したい課題である。

卒業生諸氏には、後輩の就職のために同窓会のネットワークなどを通じて変わらぬご指導を期待したい。

(就職課 磯垣節子)

New Comer 新人からの一言

京都精華大学の明日の建設に新しく参画したふたりの新人をご紹介します。

赤坂 博 就職課

第一期生で学籍番号が1番。精華短大にだれよりも早く『入学』したことが自慢。卒業後、お菓子製造会社を経て今年『再入学』

68年、短期大学絵画コースに入学当時本館は2階建てで、1・2号館とグランドしかありませんでした。

学生は英文科、美術科をあわせて200名強、教職員の方々は岡本初代学長はじめ仲間のような素晴らしい「村」でした。

30年近く経て古巣に舞い戻り、多少の戸惑いを感じていますが「精華らしく」ありつづけるよう頑張ります。

宜しくお願いします。

小松泰信 図書情報課

専門は図書館情報学。情報館で図書館情報システムや利用者教育を担当する一方、熱帯植物の採集・研究にも精を出す。

本学は、すばらしい自然環境に囲まれています。叡山電車をハイキング以外に利用することになるとは思いませんでした。

情報なんかを生業にしていると世俗の葛藤に紛れ、ともすれば四季の変化にうつろう風物を見失いがちです。

コンピュータと親しくなっても、いつも花鳥風月を感じとれる人間としての感性を大切にしたいものですね。

EVENT 案内板

アセンブリーアワー講演会

時間 10:40～12:10
場所 黎明館L101教室

◆10月2日(木)
「旧日本軍の細菌戦」
水谷尚子氏〔中国近現代史研究者〕

◆10月16日(木)
「二つの美術館のこと
～信濃デッサン館と無言館～」
窪島誠一郎氏〔信濃デッサン館館主〕

◆11月6日(木)
「暴力・自治・情報公開～産廃の町・御嵩からの報告」
柳川喜郎氏〔御嵩町町長〕

◆11月20日(木)
「文学と病気～正岡子規とフラナリー・オコナー」
鶴見貞子氏〔京都精華大学人文学部教員〕

◆12月4日(木)
定年退職記念講演
「イエスはどう生きたか」
笠原芳光氏〔京都精華大学人文学部教員〕

◆12月18日(木)
定年退職記念講演
「世紀末風詩歌談義」
岡井隆氏〔京都精華大学人文学部教員〕

京都の伝統工芸講座

時間 13:00～14:30
場所 黎明館L101教室

◆9月18日(木)
「京都の伝統産業における現状と展望」
川島春雄氏〔川島織物名誉会長〕

◆9月25日(木)
「京指物とその周辺」
和田伊三郎氏〔江南六代 京指物工芸家〕

◆10月2日(木)
「京菓子いろいろ」
山田富蔵氏〔末富社長〕

◆10月16日(木)
「映画撮影における美術について」
石原 昭氏〔東映京都美術センター常務取締役〕

◆10月23日(木)
「京都の伝統的な建築について」
安井 清氏〔(株)安井杢工務店副社長〕

◆10月30日(木)
「日本の伝統色と京都の風土」
吉岡 幸雄氏〔天然染料 染色家〕

◆11月6日(木)
「輝けるきもの美」
田畑禎彦氏〔日本染織作家協会理事長〕

◆11月20日(木)
「美術と工芸の世界について」
横山俊夫氏〔京都大学人文科学研究所助教授〕

◆11月27日(木)
「生活とデザイン」
恩地 惇氏〔GK京都取締役社長〕

◆12月4日(木)
「友禅の美～技術と造形的試行～」
森口邦彦氏〔日本工芸会常任理事〕

◆12月11日(木)
「佛像彫刻」
江里康慧氏〔佛像彫刻家〕

KINO PRESS
KYOTO SEIKA UNIVERSITY

同　総　会　通　信

同窓会総会・懇親会へのおさそい

卒業生の皆様、いかがお過ごしでしょうか。

毎年、木野祭開催中の11月3日に『同窓会総会』と『懇親会』を開いております。本年は同窓会設立10周年をかぞえるにあたり、一つの節目でもあります。昨年9月23日には西日本支部が動き始め、本年に入り香川、愛媛、広島等、県単位の分会発足の準備も着々と進み、同窓会「木野会」としては喜ばしい運びとなってまいりました。第10回同窓会総会では、皆様のご意見やお考えをお聞かせ願い、一層のネットワーク作りを広げてゆきたいと思っています。是非ご参加ください。

お友達と一緒に秋の木野、叡電精華大学前で降りてみて下さい。　（木野会会長　赤坂　博）

第10回木野会総会

1997年11月3日（祝）

午後2時～

京都精華大学・黎明館

懇親会

午後3時～5時　特設会場

Get Back to "SEIKA" 関西地区同窓会開催

去る6月22日、ザ・リッツカールトン大阪にて関西地区同窓会が開かれました。同ホテルは今年5月23日にオープンというタイムリーなものでもありました。正午、プロの司会者として活躍中の山田葵（77P 旧 山下）氏の司会のもと、赤坂博会長、中尾ハジメ学長の挨拶に続いて、法人本部長・杉本修一氏の乾杯の発声とともに始められました。宴半ばには、出番の合間をぬって吉本興業所属の漫才師ちゃらんぽらん大西（79P大西幸治）氏も駆けつけてくれ、おおいに会を盛り上げてくれました。最後には各分野に別れて、今年6月1日他界された田所伴樹氏の遺影と共に記念撮影を行いました。

閉会後、参加者全員に斎藤博前学長の顔をプリントされたTシャツが配布され、それぞれが旧友や恩師と、また、ここに来て初めて知り合った先輩や後輩たちと二次会、三次会へと宴は続けられたようです。　全卒業生の三分の二を占めるこの地区での開催に際して、卒業生をはじめ、大学職員の方々に各分野で多大な協力を戴いたことを感謝いたしたいとおもいます。

★東京支部では　支部会報発刊に続き、去る9月28日《銀座ライオン7丁目店》に於いて同窓会が開かれました。変装グッズもしっかりと用意され、学長補佐の松谷先生（VCD）もチョンマゲマン姿で登場し、会は大きく盛り上がりました。

★西日本支部は10月中に支部会報を発刊します。内容も盛り沢山。乞うご期待!

（木野会会長　赤坂　博）

ご父母とのつどい

2年目の開催となる父母懇談会を昨年の西日本に引き続き、今年度は名古屋は『名古屋都ホテル』（7月12日）、東京は『銀座文祥堂』（9月27日）、京都は本学（10月11日）の各会場で行いました。ご出席のご父母は名古屋会場が80名、東京会場が50名、京都会場が250名の多数にのぼりました。

内容は第1部の大学全般の近況をお話しする大学説明、第2部の個別面談、第3部の懇親会ですが、日頃ごぶさたしておりますご父母の皆様には幾分かでも大学についてご理解いただけたと思います。とりわけ個別面談と懇親会では、大学関係者とご父母の間で会話がはずみ、和やかな雰囲気のもとに親交を深めることができました。

尚、来年度は京都以西の西日本で開催します。

最後になりましたが、ご多忙にもかかわらずお越しいただいたご父母の皆様、貴重な時間を割いていただいた教育後援会会長上林様と中尾学長ほか教職員の皆様に感謝申し上げます。

（企画室　花谷　薫）

1998年度入試について

98年度の入試制度は、人文学部の一般入試で変更があり、一般Ⅰ期・Ⅱ期ともに2科目選択方式と論文方式で実施することになりました。2科目選択方式とは、英語・国語・日本史B・世界史Bの4科目から2科目を選択し受験するという方式で、受験生一人ひとりの得意科目をいかしやすい制度になっています。また2科目選択方式と論文方式は同日に実施され、併願も可能になりました。この制度変更によって、人文学部ではひとりの受験生が最大5回まで受験できるようになります（推薦Ⅰ・一般Ⅰ期2・Ⅱ期2）。このような受験機会の拡大は全国的な傾向になっており、たとえばセンター試験を導入したり、試験会場、試験日、試験科目が選べるといった多様な入試制度への変更が多くみられます。本学の入試制度変更もその傾向の一端といえます。

京都精華大学1998年度入試日程

人　文　学　部

試験種別	出願期間	試験日	試験科目	試験会場
公募推薦	11月1日(土)～11月14日(金)	11月22日(土)	論文	京都精華大学
一般Ⅰ期	1月12日(月)～1月27日(火)	2月11日(水)	論文方式・2科目選択方式	京都 東京 金沢 名古屋 大阪 広島 福岡 高松
一般Ⅱ期	2月16日(月)～2月27日(金)	3月9日(月)	論文方式・2科目選択方式	京都精華大学

美　術　学　部

試験種別	出願期間	試験日	試験科目	試験会場
公募推薦	11月1日(土)～11月14日(金)	11月25日(火)	専攻分野別適性検査	京都精華大学
一般Ⅰ期	1月8日(木)～1月22日(木)	2月4日(水)～2月6日(金)	デッサン・専攻分野別実技	京都精華大学
一般Ⅱ期	2月10日(火)～2月23日(月)	3月3日(火)～3月4日(水)	英語・国語・専攻分野別実技	京都精華大学

※他に自由選抜（人文）、留学生、帰国生徒、社会人の特別枠入試があります。　願書請求は入試広報課まで　フリーダイヤル 0120-075017

木野通信第28号
1997年11月1日発行
京都精華大学
京都精華大学　情報館　文化情報課〒606 京都市左京区岩倉木野町137　TEL 075-702-5323